3章◉ことばの誕生秘話

使われていた語が使われなくなるのはなぜ？……佐藤　貴裕

すべての単語は、必要だから産みだされる。それが使われなくなるには、相応の理由があるはずである。

言葉の消滅に注目した研究者に、早く、ダルメステテール（Arsene Darmesteter、1846-88。仏）がいる。彼の『ことばの一生』（"La vie de mots" 1887）には「語はいかにして消滅するか」との章があり、三つの原因を掲げるという。

a　音韻変化であまりにも語が短くなり、同音異義にさらされた語は消える傾向があった。

b　ありきたりの語では満足できないで、何らかの強力な表現を要求するような意味の分野では語の交替がはげしい。

c　歴史的な事情で制度、文物などの変化に伴って不要となった用語は消えるか内容が変わる。

（柴田省三『英語学大系　7　語彙論』（大修館書店）による）

aの「語が短くな」るというのはフランス語的だが、日本語なら元から短い語、たとえば古くコ（コ甲類）と発音された籠・蚕・粉・子に注目してもよい。現代では、籠・蚕のコは滅んでカゴ・カイコといい、粉も複合語や「身を粉にする」などをのぞけばコナという。子のコも古風な感じを受けることがあり、コドモの方がしっくりすることが少なくない。

音韻変化による例ならモチ（鳥黐）がある。鳥黐とは、モチノキなどの樹皮からとる粘着性の物質で、鳥・虫を捕らえるのに使ったものである。このモチにイヒ（飯）が付いてモチヒ（餅）の語が作られたが、平安時代後半からハ行転呼やアワ行音の混同などによりモチヰ・モチイに、そして室町時代にはモチになってしまった。このため、鳥黐のモチはほろび、トリトリモチ（鳥取黐）と姿を変えたのである（小林隆「もち（餅）ととりもち（鳥黐）の語史」『文芸研究』九四　一九八〇）。

なお、同音異義になった語が必ずしも消えるわけではない。同音類義（多義も）のような混乱しやすい関係や、口にしたくない語と同音になるなど、コミュニケーション上の支障が起きそうな場合に変化が起こる。また、単に関わった語が消えるだけでなく、右の例からも知られるように、代替語ができるのが普通である。そうなると次のbと同様に考えられる部分があることになる。

bには、新語の誕生が旧語の消滅を促すということも含まれよう。新語には、旧語にない魅力があるもの

である。辻褄があう、分かりやすいといった理知的なものだけではない。親しめる、口にしてみたいなどと思わせるのも立派な魅力である。語感のよさといってよいかと思うが、商品名などでも重視されるように、語の命を左右する重要な鍵でもある。

流行語・俗語なども、そうした面にたよるところが大きいので、感覚面での価値が下がれば急速に消えていく。たとえばイタメシは、省略が通ぶって聞こえ、メシの部分に世馴れた感じがただよい、小粋に使ってみたくなる語だった。が、誰もが使いだすと新鮮味もなくなり、現在では少々使いづらくなっている。

価値といえば、差別語の代替表現は、二重の意味で、使うこと自体に価値がある。代替表現を使うことが、差別語を使わないで済むだけでなく、良識ある進歩的社会人としての目印になったからである。差別語が急速に排除されたのもそのためであろう。

チョベリバ・MM（マジむかつく）などと極端に省略する若者言葉も、これに似ている。無関係な人には分かりにくいからこそ、使い合うことで仲間意識をつちかったり、同じ価値感を持つことを表明したり確認したりするからである。逆に、そうした表現が外部に知れてしまえば、使う価値もなくなる。

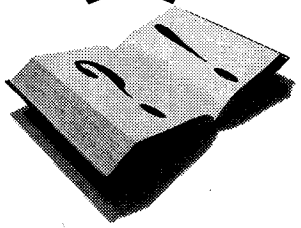
cのうち、内容（意味）が変わる例には、クルマがある。意味するところが、時代とともに牛車・荷車・人力車・自動車と変化してきたからである。なお、cの制度の変化というのを拡大解釈すれば、マスコミや学校教育によって共通語が広がるにつれて方言形が忘れられていくのも、ここに含められるかもしれない。

ところで、寝ている赤ちゃんが見せる笑顔をムシワライ（虫笑い）というが、現代ではほとんど使われないらしい。「腹の虫」がくすぐるということだろうが、そうした発想を支える古い考え方や思想がなくなったり、意識されなくなったりすると、語も消えるのであろう。指し示す現象自体は存在するのに語がなくなるので、ちょっと怪談めいてもいる。

語を支えるものとしては、語源にも注目すべきである。語源が分からなくなることは、その語が消える条件を一つ備えたことにもなる。すぐには消えなくとも、その形を保てなくなることもある。たとえば、ヒネモス（終日）は、対義語ヨモスガラ（終夜）から類推するとヒネモスガラを省略したものと考えられる。が、省略したために語源が分からなくなり、鎌倉時代以降では、ヒメモス・ヒメモソ・ヒメムス・ヒネムス・ヒネモソなどの異形を生むのである。

以上のような理由で、あるいはいくつかが重なって、語が消滅していくことになる。なかでも代替語が登場するタイプが、もっとも確実に元の語を消滅にみちびくのだが、まれには、新旧両形が併存することがあって、それはそれで言葉の真実の一面を伝えてくれる。（岐阜大学助教授）

日本語あれこれ事典



日本語学
11月
臨時増刊号
2002 VOL.21

監修
宮地　裕
甲斐睦朗

編集委員
荻野綱男
近藤泰弘
杉戸清樹
高木展郎

日本語学

11月臨時増刊号　第21巻第14号　通巻第258号

平成14年11月10日　発行
編集兼発行人　三　樹　　譲
印　刷　者　西　村　正　彦
発　行　所　明　治　書　院

〒169-0072　東京都新宿区大久保1-1-7
電話番号　03(5292)0117（代表）
振替口座　00130-7-4991番
ホームページ　http://www.meijishoin.co.jp
Eメール　nihongo1@oak.ocn.ne.jp

©株式会社　明治書院